



第79回

北海道長沼町の私立校

※2024年11月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

宿題、テストや校則がなく、チャイムも鳴らない。「先生」と呼ばれる大人もいない――。

子供の自主性を重んじる私立小学校が北海道長沼町にある。札幌市から車で東に約1時間。「まおい学びのさと小学校」(学校法人・学びのさと自由が丘学園運営)は2023年に開校した。

11月1日午後。学校を訪れると、児童は数人しかいない。学校のスタッフに尋ねると、「廃校になった隣の中学校体育館にいますよ」とのこと。仮装をした児童がハロウィーンのイベントを楽しんでいた。イベントへの参加は自由で、校舎に残っていた数人の児童は教室で折り紙をしたり、カボチャを加工したりと楽しんでいた。教員

(スタッフ)を「先生」と呼ばずに、あだ名や名前で呼んでいた。

細田孝哉校長は特色について「成績や競争によって強制的に学ばせるのではなく、子どもたちの好奇心や成長性を信頼して主体的に学ぶことを重視する」と説明する。

カリキュラムは国語や数学を学ぶ「基礎学習」が週に6コマのみ。代わりに時間割の約半分を占めるのが「プロジェクト」だ。プロジェクトは「料理」「演劇」「ものづくり」「農業・林業」の4テーマがあり、年度ごとに児童が自ら選択する。

プロジェクトの内容は年間計画で決まっているわけではなく、児童の好奇心に委ねられている。「野菜を育てたい」「鳥を飼ってみた

い」「カレーをつくりたい」。その好奇心を大切にする。

ただし、子どもたちが形にするのは一苦勞。何が必要で、何から始めたらよいか、生徒は試行錯誤する。スタッフは基本的に「サポートをするが、答えを教えない」というスタンスだ。

まおい学びのさと小学校は、学校教育法に基づいて都道府県知事などの認可を受けた専門学校や各種学校の一つ。義務教育期間ながら、このような「自由」な教育方針を掲げる学校は全国に増えつつある。

一方、そのような教育方針に対し、「社会で通用しない」「中学校や高校に上がると、受験競争が待っているのに大丈夫なのか」といった声もある。

けれど、料理をしたり、田畑で農作物を育てたりするときは必然的に計算が必要になる。漢字も知らなければ、レシピも読めない。体験を通して基礎学力を身につけ

る。それだけでなく、主体的に課題を解決する能力やチームで建設的な話し合いをするコミュニケーション能力を育むことが狙いだ。学校は説明する。宿題とテストも課さない。

「1才の経験は1才の理論にまざる」。米国の教育学者、ジョン・デューイの理論を学校は重視する。細田校長は「『自由』と『自分勝手』はまったく別物だ。課題解決への道筋を考えて主体的に行動するということは、社会人がすることも難しい。この学校で得ることは大きな強みになる」と話す。

長沼町は北海道中央に位置する人口約1万人の町で、町の約7割が田畑や牧場だ。米やタマネギなど多くの農産物を生産し、全国に「食」を提供するが、町外への転出や少子高齢化による人口減少に歯止めがかからない。14年度は、町内に3校あった町立中学校が1校に統合。19年度、5校あった町立小学校も1校に統合される状況

になっている。

町教育委員会学校課の担当者は「開校に長沼町を選んでいただきありがとうございます。学校の教育理念に賛同した方々が道外から町内に移住するケースもある。町の活性化にもつながっている」と話す。

文部科学省によると、23年度の不登校の小中学生は34万6482人（前年比4万7434人増）と過去最多を更新。北海道内の1000人当たりの不登校児は41・6人で、全国平均（37・2人）を7年連続で上回った。

教育評論家の尾木尚樹氏は「フレックススクールだけでなく、私立校で児童生徒らが多様な教育を受けられる機会を増やしていくことは非常に重要だ。新型コロナウイルス禍でオンライン授業も浸透し、今は『学校を休むことも権利』という認識も広まっている。さまざまな選択肢があっという」と語った。